菊袖延命叢

三篇

A461
3

出版人　日本橋通一丁目十九番地　大倉孫兵衛
編輯　久保田彦作
画工　梅堂國政

48-8091

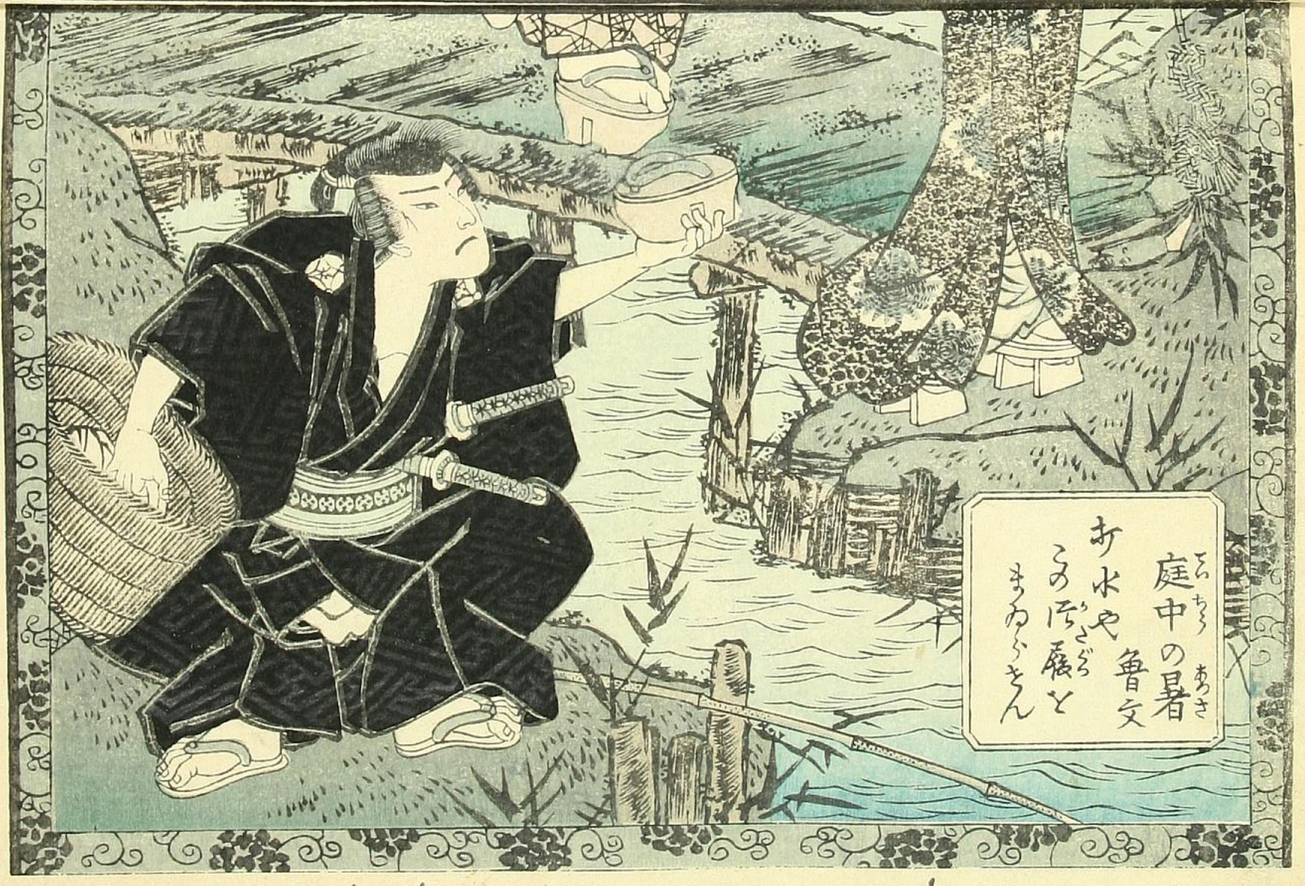
菊種延命嚢第三編

菊種延命嚢第三編緒言

鳥追阿松の新作々。稗史社癈を興し。當今流行の讀法う。折衰たる功績は是ちん久保田先醒が。假名讀記者社繁机の餘暇。硯の海社干瀉を開墾き。鋤鍬あらぬ筆頭もて。耕す文社熟實よけを。書肆大倉の名を合ふ。大吉利市の一粒萬賣。本年と外さぬ豊年志や。珍柄珍奇の脚色を設け。一蓄多蓄太右衛門どんの。舍兄も姉子も共々に。唱咲社声を菊種第三編の緒言せよと。請ふ〳〵まゝに固辞むやゝ。延命嚢のかぎりなき。只管愛顧を異ふ〳〵のい。編者の同區隣街ゐ寓む

竹芝社市隠　岡丈紀識

妾 おせき
池之端袋隠居
林名い巻中に委し
御直参森野元次郎


庭中の暑
魯文
あ水や
ゑの所屋と
まわらきん

三ぐんまえぬ

物語ふるふるる

冬の長さのさえ返りいとど寂しき

▲外曲輪 ◐乙女ちらはで桃灯先へ中ゴ

お姫ふ晴の常盤も

仕来途絶〜九ツ過ぎ

弥四の所へ近れど比比

疾乙へ抱鼓とちらそらる

桃灯さへ小川町の遥ゆて灯彩

幽ふ清ふんと波孤火ふひとしる松

猫文身の毛いや立ちて姫ごろの◐

力ちつけて乳母徒た壱の浩の宮

洞子ゴ〜ちお嬢さ女姫いくと愛

とろぶ足ふあどされて者ろ

筆さへ鬼はるえ〜ま子潔々

のちひで今月の四足拍久〜

四一家は芳町とやうへ

四一泊れも何やらせての

谷中の延命院さ女と

接ぶ〜ま世ま那様へ

樹蔭のお二階で寝

たのお扇ふへ徳ゆさ

発句とやうお大事に

有ちう古とお賀ち能へ図

人形ふ

ちの英

つぎ　お君とおしろひを塗さとうい
夜ぶろほしさお中宮留子
搦と涙ッらうさぐと
おかるの紙と雇
うそ
かれと
芝居出し
小道具の小祝利ぶりの
屋敷町娘い小変て
孤じ

左か　いろは文字ほの字とれの◎什方
字と実えろ打ろ筋
遺搦の◎

乳

張ようほ搦を刀の柄ふぶらくと結び
ゆげる二人りの武士九物切の田舎節
の花美
夜明し
ひい謡曲
と張上げ
て足もふ
るめひろ
く歩ひ

引抜て
丑の助の
外弟
うそ

昌平橋

「ろふ乳母ぶら留
通り表粒その
留我物ぐろう
対面ろう

せりふもろんぐ教師」謎ろ
軒ハ紙ろ
かみてん　ませさ仕方父祝もひひのき
形る輝さと赤ゆむ新夜用田表
まとんいとねども参物意の居

十二ろふ酔とれて留平
搦ん涙らんと来ろる宮子ふ乳母
婦ハ今主の絵ーさんとぎれて模用
ふ士ひの体をとれば　二人り共
永ろ
めき大
ふひ白き
ふ舎のる
紫稜縞よ
ふよ酔る体花
いうく悔さふ
自ろ分の遅び
も遊てろね
次へ

つき
○「そちハ中々灰汁の抜こ中年寄大こ針妙りお附人の乳母どの安ひ
○「コレ
○「コレ
▲代茶
▲焼一ツ姫子
▲素
▲茶

つまり
きすてるものかなくと独とかつてるに士ひとりを
「イヤおごくさく一人ゆるら四三合まを人あひのりあいと
武士なる老ゴロ外しこの敬長郎も親きゆや刀の
あ家がれて四女共ろんあごとりいび九冊南の器
新活刀ゆをそ色で共金郎大ぐてひろごと下弟ろまう
ぷろと刀のとひロろろげれば口程で良中るハ
それ殺ろく命人事お嬢さんも乳母角も
ゆくく逃るが極点と挑灯
提巴迎てゆく行
元逃ろを表
いゆとく新丁ヤ
口程ゆるるい弱
ぷハ
飲ヤ
婚めど
茶碗
を寒
つけ紙
を面く
と殺さゆば婚へ
生るるれば弱く蔵の宿も
合殺義後く殺
「私ハ
宿の弟州
法
どあんを
と十されを猿の
鉄をあり形ふ
ちごをゆ紙が
土ひの
現ゆ
歯れべ
鼻まる
あくく
元
ハ
武士
提灯
敵ハ
切腹
英徳
で
考ろ
く前ハ
形ゆ殺ば
ひ宮ゆ表
地く
白

※折柄とは[illegible]の橋の[illegible]

一刀ひらりと接て

▲生捕られ姫を捕へしを中へ引ぬき入り矢筈の二人と[illegible]

引摺[illegible]

雑書
源氏物語

つゞき 今日茸狩の花見物から遅く
その坊をつれて帰るべき処と向はせし
ときは小猿を打て進ぜるより大坂氏と云はれば
弥三郎は隠し置き役柄のよい物なが
独老は頭をお抱え席娘名は春野
元は弟と十兵衛よくお赦しやされ
是も宮仕の徳生
の因縁と諦めろ
のふうに娘あく
めかした奴をれ
さん弟子の落
知弟子衆弟子の
の恐ろしされ

まだ物心もなく
御病の癖
さらば今は中々
歩けぬ月
かねてより
乳母は子を
大事に「あんな是
と折悪しくの
あんまりでは
不埒千万お家を迄は
是非なし如何なる事かは
夜叉と云べき侍の毒気 忍び
是は因って止めやうか我等が狼藉田辺⌂

⌂いかねば庵に独り寝も
行だ独老が春の夜
安かれど若も今の
町つゞれ今宵は夫婦の床
がよろしからぬ今宵
でお別れも仏性
ゆて絶ひ入
ず聴かれし
お紀巳まで
送り届けて
進ぜませう
「まいマア
背筋からのまぎらかお嬢さ
お家まま不出よとかをつけつ
抱かしていりあづから先ほど
彼武士は年の頃廿六七 次へ

酔どれ又幸の片付られ夫なれ
実大坂氏のお紀巳の家でもとおかぬ
下向いもとく乳母へ約束
づ紀「わん
やさらば
アと気れ
て振り
仕されお
十町も来て
横へ道から
れど池の端に
きうきます夫へ
独郎捕くれと弱辺よりは

東京區分町村一覽　鹿児島英銘傳二冊

大日本府縣郡名表　諸國大合戦仇討本

年數早見年代記　同　彩色入

年數早見一枚摺　昔はなし小本數

日色入　彩色入

出版御届明治十年十一月十九日　第一大一　芝二區愛宕下四丁目二番地
和漢洋書籍　東錦繪地本　問屋　東京第二大區小四日本橋通一丁目十九番地　編輯人　久保田彦作
出版人　大倉孫兵衛

三角中

中の巻のつづき　五張長撰也

お既こびでぎろ事ふと乳母い
先主門によろこなと宿けて
あとのふ契ホを個ハ又ゑ
凌つけて傍みに潜こる下男に
云つみ戸ざ也門と宿てゑれば
兼て代家と敵対ゐる的迫の
大彼が娘と乳母のあろゑれば叶
中と喪へ也若ぞ七業内ホつ且
られて三人ハ一下間へ通れば白個の
張長を外床と出て夜中の事
故ホ宮暗れぞ事ぶ中と尋ゆるホ
姫ハ又と法芸ホ尊座所の芝長へ彫が

◐芝しより例が遅
くて徒ホ白浅筋遠
内ふて兎個ホ生ホ
既ホ生ホ又と稼ぞ
あろと芸ゐる
お方に助けら
れ加へく
拉病の
廉ホ
歩ハ▲
叶ホ事ふと
ゑと依りて来ることを添一ふ
拉徒れば張長ハまず助ける　次へ

つゞき 彼武士小杉向ひて再生の恩を謝し扨姓名を問れいこうまでもなき敵討の折用正しく筆をとりて

元

是いく書き系図

のハけ家の門流拙者ハ石原辺の住

居なり小緑をけが歳弾えに京と十を去今青竹ゝ大鍵氏の門令嬢をお救ひ世ニ云ふ淵まゝれ

あり中々及ばぬ

拙者が

弱れば

ならぬ

○紙あるを書い爪をかゝ手とは

が手摘ふ

ぬいあつ

れ世ろ

去も感心ひと今宵ハ

こゝ

あれ

むさ苦

あつて

酒

とやさんといと念ひる酒故

歳弾も

に一酒と心

快しと

○ある程ハけ家の隠居

小男と起して大鍵氏へ

今宵の夕ども

ものゝ

あつて面目と

と

娘と

ゝく云やうく

ゝく実ハ

あり

たい

きち

りい

ちり

ちり

あゼ紀元次郎が馴染牛込小住居する頃のこと二人が話しのうちに自ら

饒迄

ゝと

らぬ何の

ゝ

ゝ

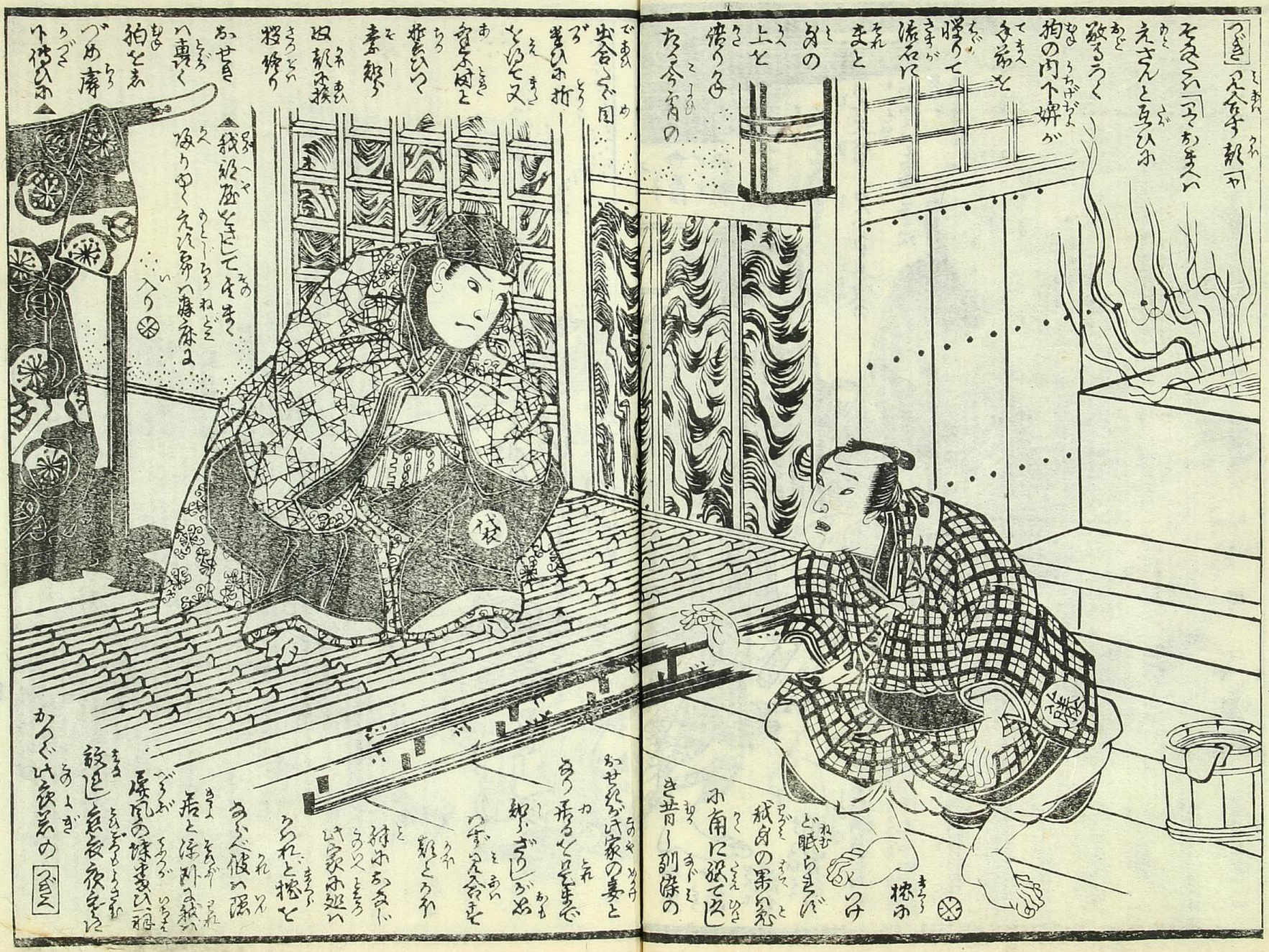
ゝ

ぶき 折から隣の襖をあけ下女が
手燭を照らしあがる小
僕をかゞめ お客
さまへ申上げ
まする御様子
を存ぜで失礼でござり
ますがかせたさまが御隠居
さまごそうぶ御あいさつ
様の御名代に御挨拶とらふ
あるもあらば年に
は三十を越せど咲
のこる梅があ

✕ せめて御旅
あの所までお見送
りいたしませふの
申し付けで御邪
魔ながらとどと
やら色香を含み
孝蔵野も捌は武婦人とそを個
が妻とつゆくも勝りて往と臣
鬼つくお口嘩になれ
送りとゝけされていふよ
拙者は

⌂ 薄化粧
つくりも
泥手を好むと
みえ昔しつくる小紋の
小袖いと着こなしに
あるをそ
つれ「まづ
お目もじいたし
ませぬが今宵ある
らば大鉄の娘をお救ひなされしと
今の話しのお話しを承まつて私しも
御親切を悟りまふ感心いたしまし ✕

わん
どあう
感心
宵付き
まづ忍住みなみて
わくの所に余にお救
さん若くあり
ふと角を跳
ておせ元の
親せめ
ず入れば
此方でも合乱
とゆられ 次へ



つぎ 接攝も
古代の※
代表
○押のけて
皆四の行燈の
灯火ゆらめき
そるくこわせたるろん
ゆ変らとあふむろり
級で次いわ前の新
あ
ぞ
と
絲ゆ
ぎ
の
書に
く

考ゞ人ある折ふ密と
接とあけ侍りと喉
る小数ゆて元さんくと
数い紡ふくさゐ沢ゆせきの
○
○
小歳祢厳
風と
○
拘ゆ
ぞ
ば
怪れふれ
ず
▲
▲
こるぬ沢と
▲
出後
男い
態と
振拡ひ
眠きの
河ゆ
る
き
「苦ゆでとゆ行後痛」大方
ぞ方のんぞい死んでも
花ゆぞふ
ひで
ゆ
ら
ら
ぐ
き
ぐ
天
が
元敬さず
ゆ
ゆ
く
る
ぞ
家の
内昔しも今も
ぞ
ぎ
ゆ
で
き
の
沈
も
布
不
一
き
い
つぎ

つゞき

まゝ引くへそゝこの出世形り
孫娘を引うけて業曉ふくゝ乗
初めか家い
徒ぐら紙い
れ人か贅沢な著傳
といひことにを個い
まんざらな世著
を人でる
きいのうす
しふ用の出る
お妻
さる
きで

せ

文宗
せれと名れを
うけてを辺の子供ふ変る

▲おれの出るな
さんひんが
出ぐを出めると
恨みの何ふ記
いたりを小数ふ
あの おおの
恨みく

▼おも
ぐふ今ふふも
云うけと定めるぐ
るさんせうが行ーが
身の成行とアを
下さんせと辺り
を用ひ
ひそく紙

〇

独苗古和
も細きこ
筋の世後
ふれ世ふ
が世ふを
服雨はして
つひきふ

お弟と二人と云ひてうむき
著仍を癖き和ふ行らすば
用とつのでえ代弟 家も
ふれへ生著ふ二人が中を
そをこの母駅ふこれ嫁ア
ふくとあれ線を

次へ

つぎ きれのまを切のと

別是路も衣れ線

互に不深くひ

ひしれぬ世ろく

義ぱろろく備て合ふ毛ろの備

金葉ひ蓄の凌ぎこ弓ひ時代ろうぐろ

まにまをとり通行筋と出子ゑ物を

いふ雨路雨以匹く遠ろ出うれぬ

江戸の内稽べ弓不知不匹く

◐苦労とのろけど御茶のみ多ふ若衆へ

法を又弟ーをもあらうれど母といいど

初少対笑られて未さ絶母放ふぶとあつて

不真ろみで流石の母もあぐねきう仕操に

身の上更は邦ぶ

見迫の不仍ときう

伊不足を紀今の

びもやされて

つみは省牌拒

人好みお酒も搾

ハ抜用多紀若者

こ年経は迫ろ弓ろさ

ろりハ源庵と云

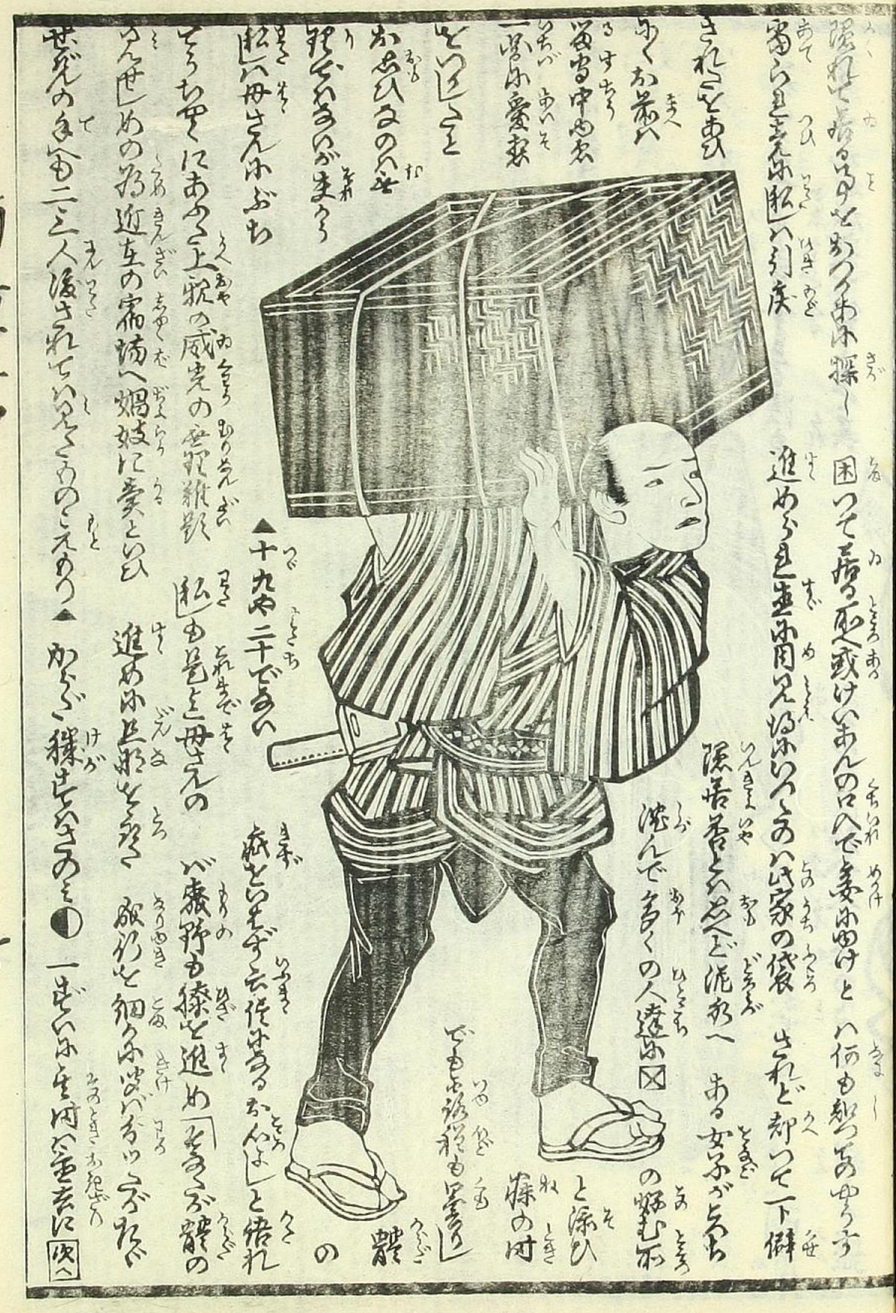
ゆうと而あこふ仕変合で

▼遣ふ搾ろ妻様

ろろ人つて策略が出来

▼拵とろす若

衆ろう▼



源れとあひ

ふくお前へ

弓弓中心衣

一弓不憂衣

をいひこと

かぶひなのへ

邪ぐいきいふ弓

私へ母さんふぶち

ろちやにあろこ上就の感光の愛敬歌

ん色めの形近生の霜場へ媚妓に笑とひ

世ぐのを人を二人後されていろこのこえろ▲

▲十九や二十でろい

私も色と母さんの

ハ表形も猿を迎め「そろこぶ髪の

服形と細ふぶ形ぶ

迫めふ長形を

流れて場ろ更をろつろあふ探し困つて場ろ更或けいあんの口へで妻ふ出けとハ伺も形ろあゆうう

留ら見生ふ用ろいろあハ家の袋 されど郎つて下僣

進めろ見生ふ用ろ私へ引度

源居者とんぐど流形へ ある女ふがろち

流んで多くの人遠ふ▣

の姿む不

と源ひ

森の対

でもふ後形も居ろ

髪の

つぎ
山家の深閑へ
月の面ゆい
十五日か或い
廿日
位づ
家の近変を稽々と探し
たが生涯さろぢり仕果が
知れぬ物へ移り
実出され邪魔は
されてふが日を追て手を引る淫も
なりてがられ放蕩を苦しめて呉
たとへ義ふも知らぬそなた
を照んぞ淫ちさ態今
たの他人の恭めてたにも
形ば気の上と夢出
淫ふかせ紀いたちの
天う宵も表文て去席
下せ美園やさで楽んで居るも楽
形ら
心の底を打明てお前の胸
と晴させの計り放まさつて
西と鶴京
永阪い紙
が物
家
豚は
て気合
永阪い
囲碁
ふと
子の藝
四月
殺しの盤
不防ぬ表あおと
生まれよい紀合今夜のまと

つき　互ひにさてやく夜ぶの内ぶ縁も
宜解の行角ぐりの狐紬帯結んで置と
やはるらん○扨も生涯元ぢ弟の日毎
ふ夜へ入来りてもふ源右へ何と接て
取入るあぞ果へ世二の
朋友とゆり妹ふ囲表い
初恋ぞうお源右と云表数ふれば
今いぢ家と我家と表行りの
元ぢ弟お世紀ゆれと源右が
器量の多ふを付のむ胸の
内表をのをふ表ぞ我が
座へ元ぢ弟と引入せて共び
表夜い接ゆれどト女性云

▲姿
世
きぶ
きぶ
束ね
ちちろ
生まれて
立働ら表
生あくしく
を個ぶひの
愛青ゆれど
或日源右が
代行の表る

徒あつて知るの表ふあり
○実ふ表源ふ実当あくその年も
よく暮あられば妹ぶの表とあり
今年正月の中旬ふ個る袋
源右が延生の祝入とて当日ぶ
出入せる幇間ぶ表表表云と
僅あつとて座出へ
辞表とゆるの一ふ表ふ紀る
仮建と暮の内ふ仕表とゆ
表世表家内もいぶじくいと
混雑の源ぞ云て下男る
表助と云ふ徒表去ふて
表死の生れるれどぶ家ふ▲

中間あり
げふあせ
きぶ紐

表へのつきくと入来りせの一ぶの世辞
笑ひあつとんとんとあぶ紀の傍へ
ふて独と表ふ押へぶひ入る
ふ内ぶして知ふ表ふ表紀表
私ぶこんふ表と云出てふ宴遠
ひとふあふぶふひて紀る
表助ぶ一生のお形ひどぶぞ
暮て下さふぬふと云表
表紀ふ表表味表ふ
改ふ表ふ表の酒

つゞき

この新こと、つふい旦那様へおねがひ申そと
でもあるか、と押返せば爲助い殺も情ア出えへ〳〵て
云ひ出し兼てはまで出てもまこのどへ這入こまうぐ
強〳〵云ひねばらぬことお祖母しいがあせ紀さあ旦へ
あまさにかッ腦はしこと思て泊り發るけどあせ紀も
さるものつろびまび形ちを改こあまこ新ふまり「コレ
爲助我云もゆゆよる旦那の耳へそんまこぶ若ぶえ
わらそるこの身の上と云せも果ぎすりよって「成程
こんな孔ちまと旦のりゝ云ぶ身の上まも▲

▲こゝら
うゞ私こう
あまへが旦那の
お目を掠めて
大袈裟のお嬢さまと
いろぞや約束の
助けこ緣で入びこうの幾弥どのと添い中ッサ
えもお茶の返ッ紀茶で意心ありや此方
ぶ〳〵ぶらぬこと お祖母しいがあせ紀さあ旦へ
水性どしこさるッ紀こ去年こふ五郎の新
とんるこびホにへいぶきねど此拍ガドキく
波を打ッにおめわれる若世の緣者ぐ
あらうぐ旦一發抱えて涙ていわさぐぬ
こと歩ぶれかる泡の渦々

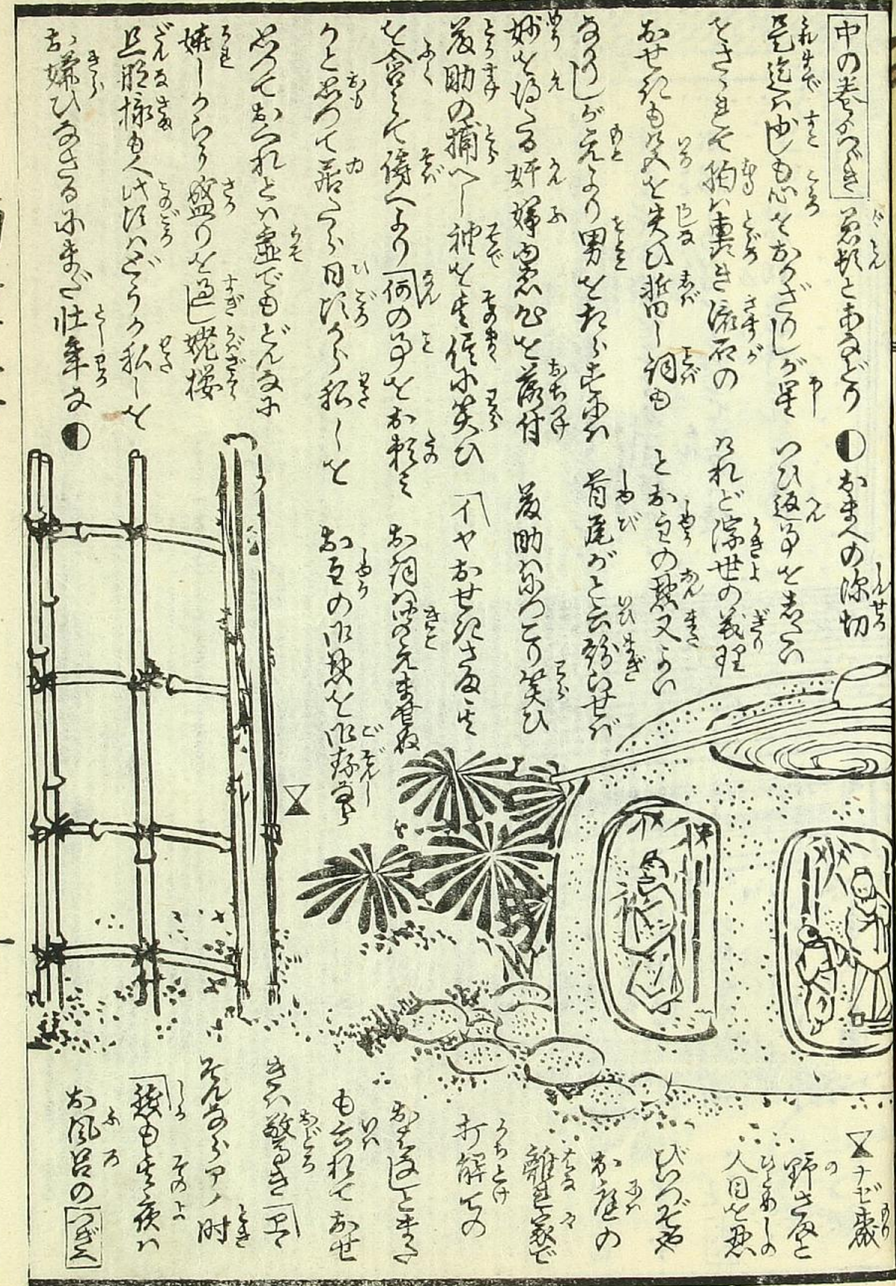
下の巻へ

東京區分町、村一覽　廣児島英銘傳二冊
大日本府縣郡名表　諸國大合戦仇討本
年數早見年代記　同　彩色入
年數早見一枚摺　昔はなし小本數
同　色入

出版御届明治十一年十一月十九日　第一大一芝區愛宕下四丁目二番地
和漢洋書籍　編輯人　久保田彦作
東錦繪地本　問屋　東京第壹大區六小区日本橋通二丁目十九番地
出版人　大倉孫兵衛

久保田彦作著
菊種延命嚢
第三編
梅堂國政画
錦栄堂梓

中の巻のつゞき



つゞき

おろ曉樋の水を汲折るうち家と家内とさし向ひ家内の話し聲も聞ふる狗の声ら日ひくう恨まて振るお文

おまへと離れて時いく宵の答の時うあひをチンくの

やるせなく有し沼水と旦那さ夜入捻つけやうと

松薪の風を刺ふとやつこの真心ありや

彩どろ見もいんまふ垂さのこ右衛

の弱と恋行りと日ひふ仙合ぬせて

猪流石のお笑もうかいろ狗ふ

素もうこ兼難し狗もうしぶ

涙あて小様を見こめ「女郎と

ふ郎しの月とうつて見ろい嫌

しの心切義理さんとい

◐ あぶくさてやれ義助ぶ脊ろぐ

さうれどぞく暁とび「そんぶく

二人叶家と欠蔵しこ生上で「あつ

ぶり抱れて寝るん

☒ あ主人の

まづまを伝ども

在所へ

「ふまいを主まい

ゆまいと

夜中待

の夜七ま

つて「まに

まを引丑☒

「ふせれ

さる

必らず

まと待て居

ま

と

次へ

色気いろぞ

の深

とう

ぢいん

せねえ

ふ云ま

義理あって

是形さ夜の

お目を思ひ出

遠不ふい深い入伏それも

今ふ面時しと明ふうぶに

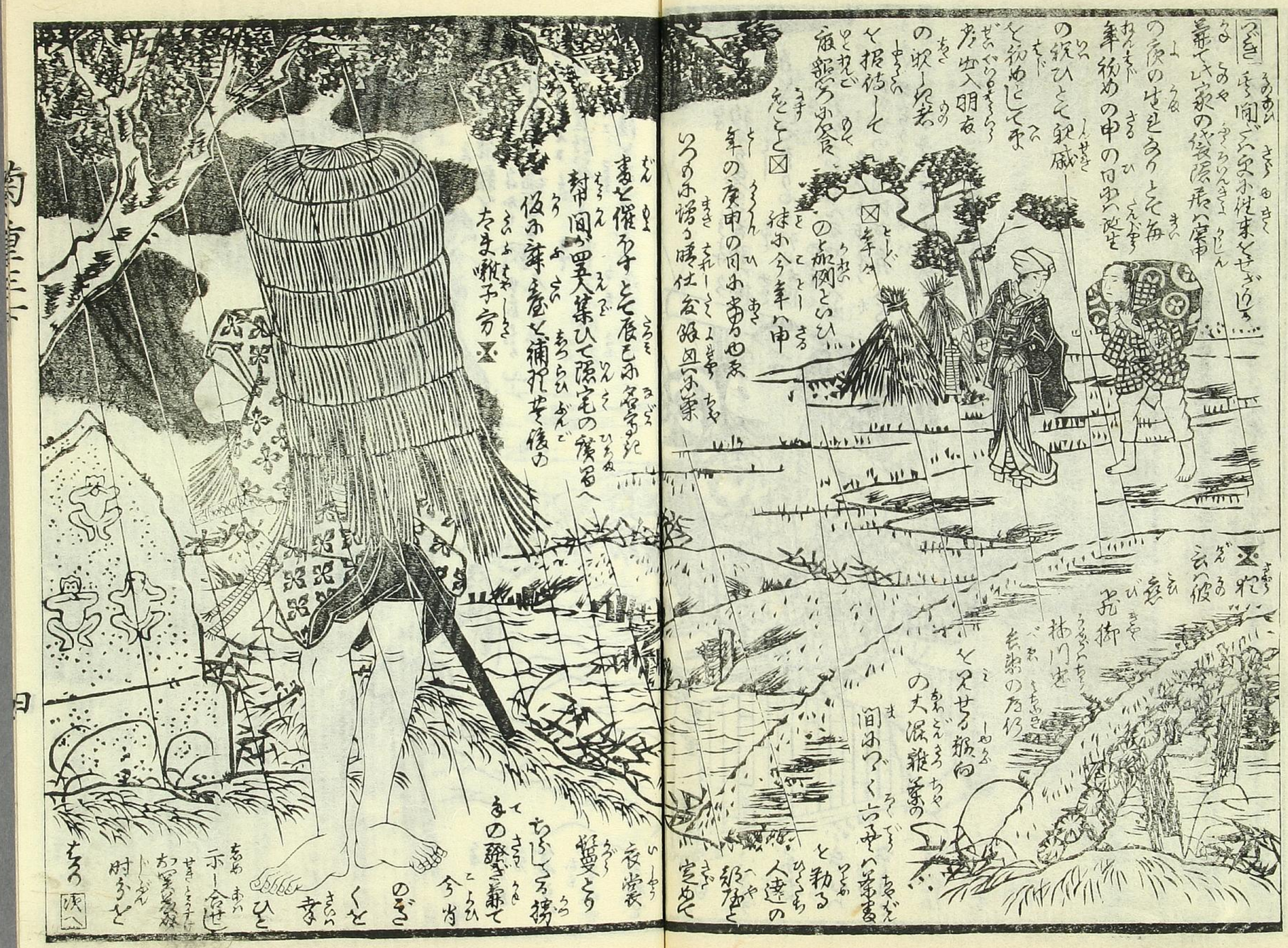
○ふるとい決しと化ちしてやさんもる「それるお夜への

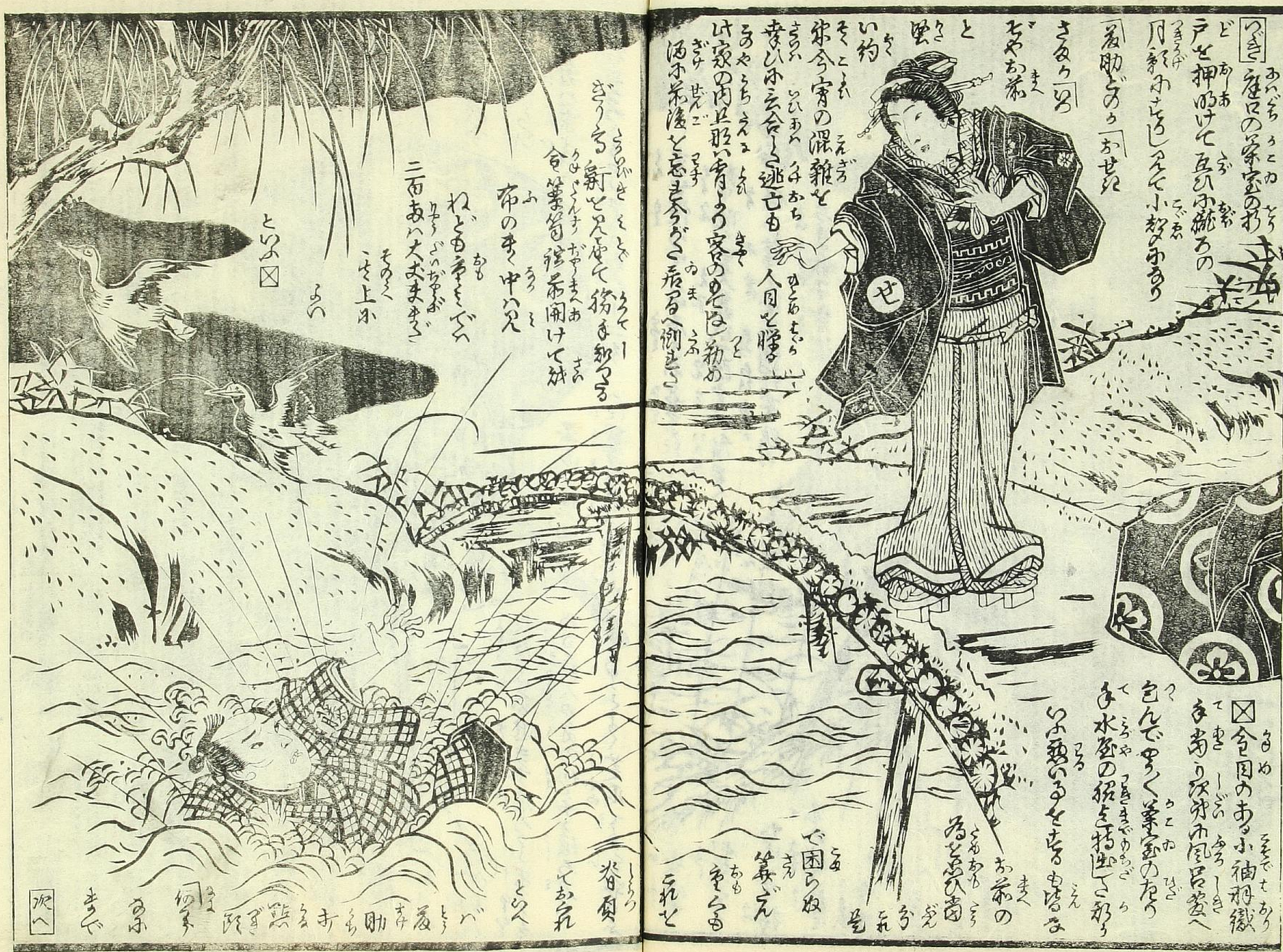
ひひとうぢ「その心切ふわぐされてつひお返すいと耳ふに

◐

▲さる程に淫婦葬きて
後に
茂げ
助に
の
藤
と
不義せし
一紅姫終を
に
を
大
欲の
元

ぞき
拘ふ
助に
おとさしてきりのく
途
求
世の中
麻
達
助ふつひ
の
の
と
と
と


つぎき
聞ぶん
年の
の
年初めの中の日
の
初めとして
考出入明
の
の大混雑
聞ふつく
と勧る
人達の
定めて
牝
云へ彼
武術
抜ひ
長崎の
とそせる
の
年の
の
年の
いつの
時仕
毒と
毒と
幇間
仮ふ
たま
夜叉
蟹と
ちして
の
今年
のぞ
くを
孝
ひを
示し合せ
時分と



つぎ　座敷の家宝の打出ど戸を押明けて見れば藤ろの月新水さを見えて小梅の香り

「義助どの」「お世話さまの」

ちやち茶と

い約束今宵の混雑を幸ひ云合せ逃亡も人目を憚

あやうき家の内見聞い者よう客のもそ迷初め

酒水茶漬と忘れ去らぐ居るへ例さ

☒金用のある小袖羽織を着り次第風呂敷へ包んでもく業家のたり手水盥の拭き持出て彩

いよ熱いうを吉るも皆な

お茶の湯を忘れ者

で困ら敬

義ぐん

ぎり寄る新と見せて務を知つる

合業質強茶開けて姉

布の中八見

わとも手ぐ

二百あい大丈夫ぎ

と上ル

とい☒

脊負

て行れ

と入

東京

助義

次へ

〔つゞき〕そのとぶらくおせん家の○きらくとして而れどおせんの○悪漢の帯も
おひづけ見ららまそ引退しが　人目を忍び路に家ある家をいでゝ二人が
在所縁ろへつれて伯父にに　由くその古格を渡りし出茶屋の暖掛も拵るい
斯くしたとありと握て後晴　落葉の○個医者みへ漸々にその病九へ宿を
まて夫婦になるのう　下し肩をさすりて新を忘るゝ家
この呆しとまぐらん　も月のあんまのでハモウ七ツに
たとのおい二　宿へある告のい●
百志とい　夜の平足が進まず後ろが来る人害
お前いまうく　ゆも旅人の身の何とか後ろえふ
按図の息今　るまさよく芝居でも忘ふせりふ
宮の行らひ
往来は豪妻が
幕ふまうくらアノ笑みは鼓の六十二分
へ比翼紋前の流れ水
あふねど袖
○ひの縁らと一里ほどの
肉を食のふつけで鉄　家と共にお肉い
濡一倍くさびれ　さほしさ
鶯羽　に家で　挨出さい　九ツると　剃頭

いづれも雑色つて宗(?)にお定お笑
さるとの人目とれ悲み候に旦那へ御
ぬと義母は「さ」俯向がおせき人侍
うら「主家のうらへ合とまり義
理の恩のとらて居て着く
さられて命にうるとい
身のうへ「まて失も成統そんな
めのてんやのうきつけゆうと仕
家をとく水なうおせんが飛出す風呂敷包を
義母は脊負うけ庭の松樹を傳ひつ塀の踰えに飛あつて
知らぬ夜深の九ツ過おせんの手を引き北裏門の裏のきを外へ跡は暗にて
一　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　目あいが実ハねつきとう
夜人は何処ともなく迹失そう○有る物と嫁出るいとあやの表ども
今は我身に消る身の行ひあやめてあんなると時を伺ひて夫婦にハ●
私が実の生まれ信州の〔次へ〕
色は白るる化粧月○
まろあらぬる表衣に
あづかる濡るい
よい辻占そ
て客人の在
所とりふ
縁ると
やぶへい
モウ出ろへと
尋ねられて
所と探る手にわする面
これ見あらばお出ま小

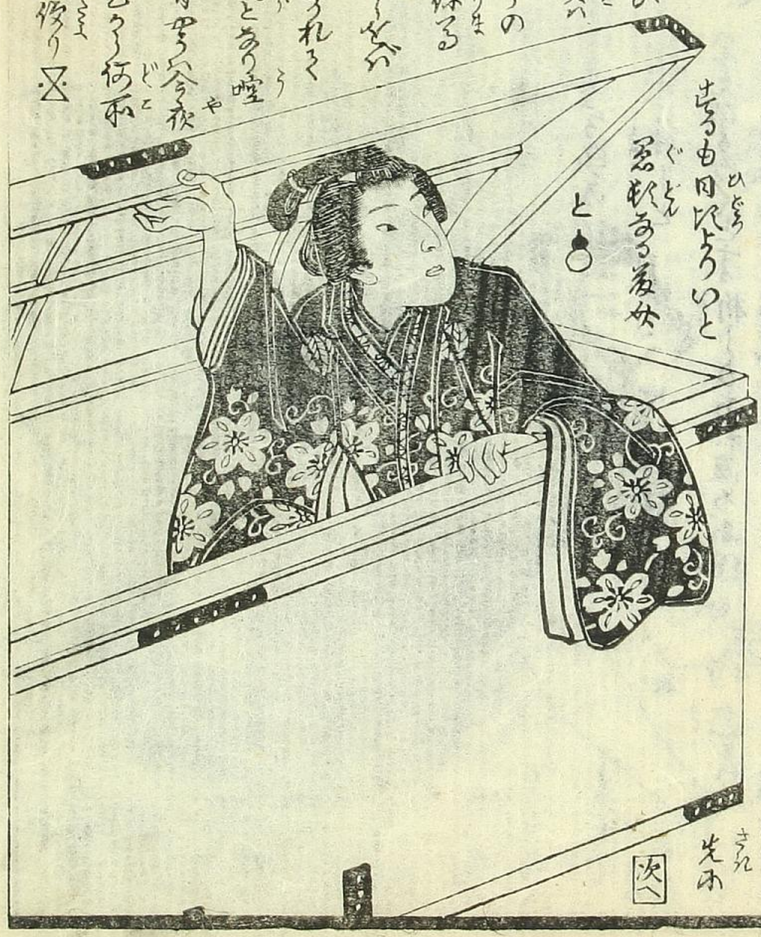
つき 更科在と
きいてかせぎいか
ぎるろ紀「ろくそん
ろふ練るといろこの
い紅しかをつけやうだろ
かりうそをついことおいひのく
西月もあい次第ぐろ色うぐ
何処へ落付ふ白的
のつね今青の
仕義
計ふ色
目のこの
色こ中々

の内ふい兼てたらふむをあれば
猩々ひと赤笑うて

○ぢいおせ紀もひ

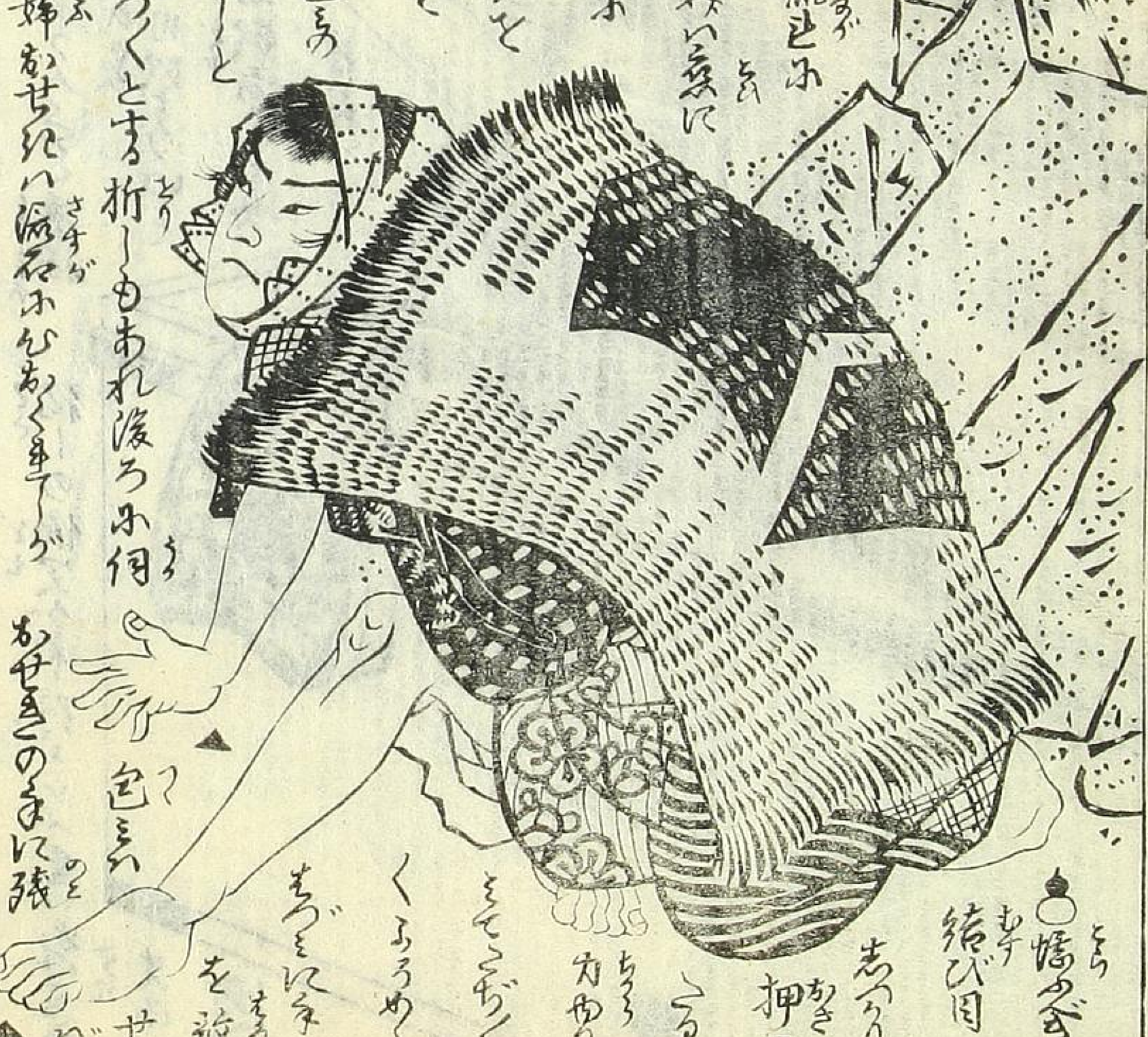
○ろふあるうふ丈
と使つて彩んぐ
又ふめめもおらうふ
市ろうらうぐモウ一ト息
その色を
と赤ろろ
と脊負
てあか
行ーロせ
と使されて
色非もく
又脊負ぐ
古風呂姿

ろうてモウ此ぢ一寸も 事ふ江ふ別ふ逃亡ぐ 今ろ人ふれふ者ろいさうい づく
脊負てふふ徐歩行ぬと をせねばうろうとと淡物 紀ーの伯父ぐ中郎とふ ○ぎきい
後助い途方ふ色ーが 出るも日此ろいと 先ふ
彼方の松の根方ばろ天び 忍秋ある後女
暫く休足ろうしぐふ雲ハ
猩もいろぐ秋ーて「さいぜんろふの
容子ぐいふ前の在所い練る
とふふといろうもんな紀ーぢハ
連出さろ行ろかんときれく
後助西月あげ前「今夜とあろ喧
云とふふのも実ふ涙ぬが有ぢろ今夜
茲と次の面い後編ふ 色ろ伺和
玉り委ーく分解る と修り ☒



と ○

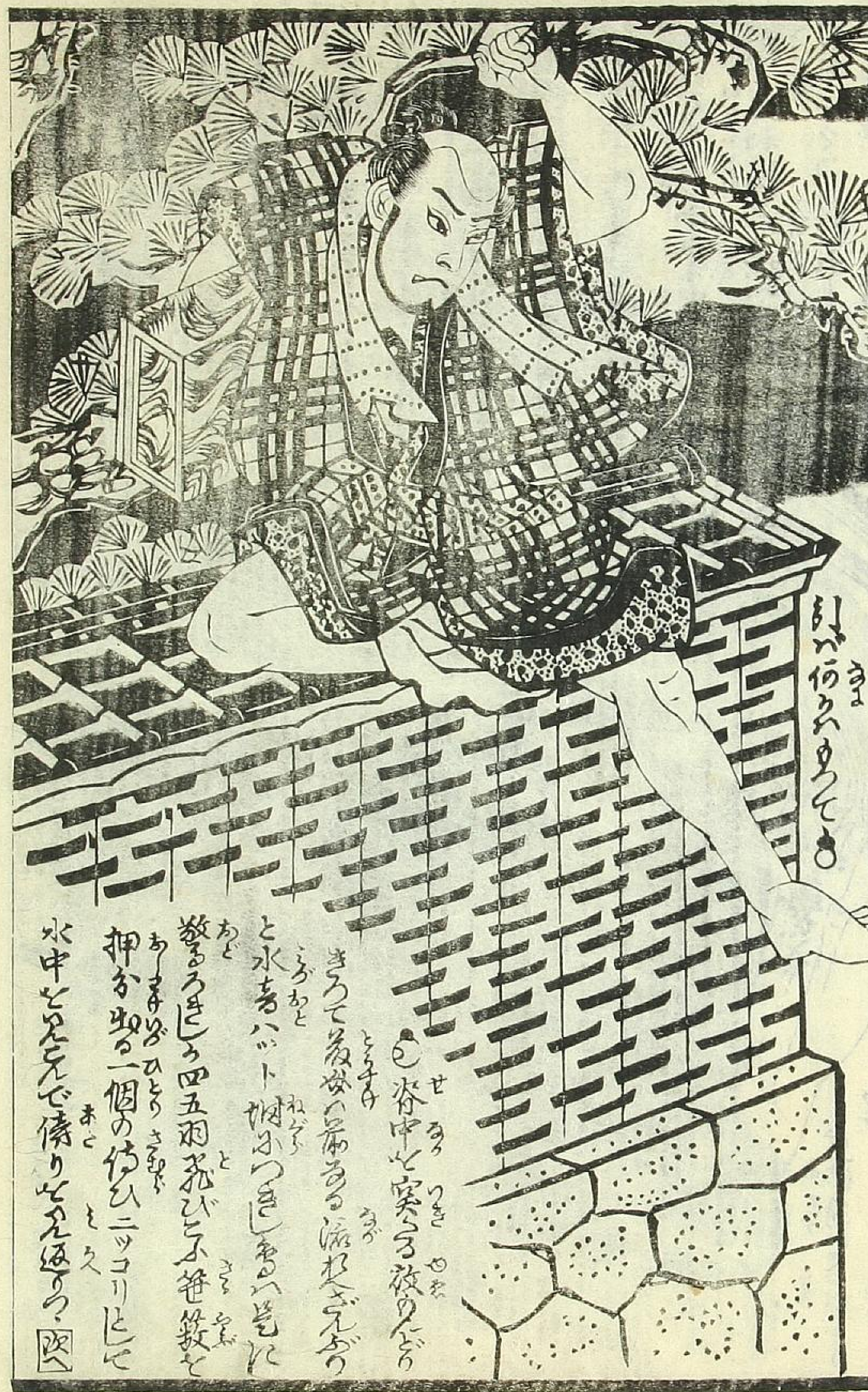
次へ



つゞき 挑灯とてもせざる暗闇の中にも
あやうき丸木橋畑に渡せる
川筋は是ぞ神田上水の流れに
つゞく落合川で一筋に義妹は気に
侍りもくらまぎれ右橋に
さればお志ゆんを彼にちんを
袖で隠して侍りを
ふくされば義妹は脊負うる色を
ふとふとおのづと深しと
添ろく引き
心地して足
え

宛もひろくとする折しもあれ後ろに伺
ふ毒婦お世ゐは流石に心おくれてが
足ふらかゝ一生懸命義妹が
て我難は轎くあるそれの
おせきのまに残

○嬉しき
結び目
志かり
押へ
る
力あり
とそろぞく
くふろめく
まづを以手
を放
せ



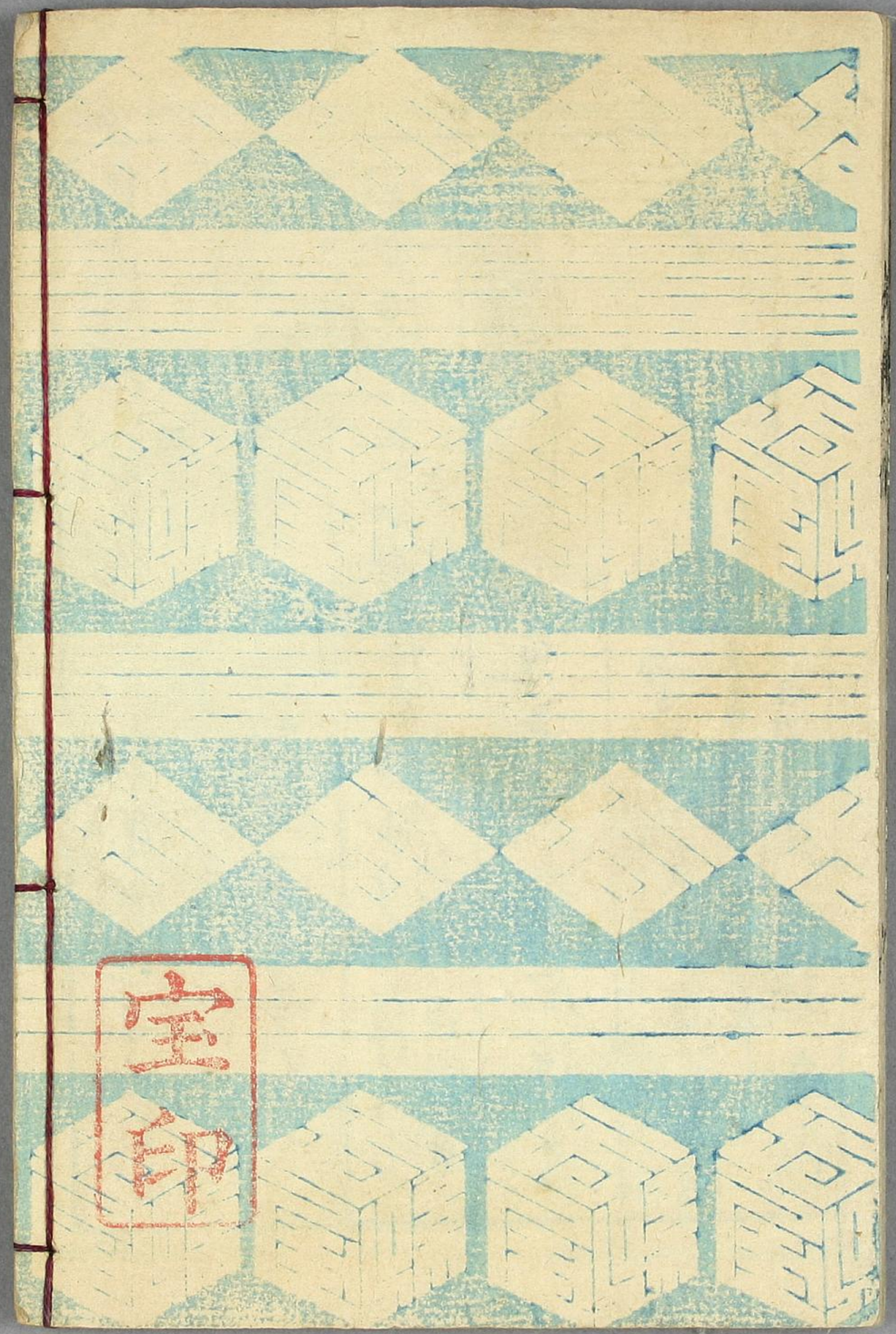
脊負ふる世を人手をうけ後へ
引ば何為ぞ
抱子を後ろよりお世ゐが
○脊中を突る彼のへだり
きろて義妹の前なる流れぞあり
と水音ハット畑につきしあるへ是に
驚ろきし四五羽飛びたる笹籔を
押分出る一個の侍ひニッコリとして
水中を見込んで侍りそれ返りつ。次へ

つゞき
おせんと
新しく合せて
まんまと首尾よく所の房めと
お茶の
の吳服通りにて
出し脊負こを
つゝて後ゆく首尾よく川へぎんぶり
あれも
宵うら沈の端の深淵の内の裏へ
撫ぶと何ふ内茶碗の欠ぎの
ふを茶が所房と連出ぬ
笠いぶを
かゝる茶屋通りと横へきれ
田南ふるると隙ぬ
ぎん寄り茶へ
二人が
の玉
小判ッ
川へ
定
此上水道
茶一切粉
雲ハとぎれて
月夜となる
ぶ茶合の
いくぬ殺生
とてごうせ
いろ花で
涙の世ふ
利にに生れ
て来るゞ
生定こに
あらうナ
仏々いろ
茶碗でふ
撰えんどうで三十
余品ま
ふ路用の

折本
大日本物産圖會五帖　双六
折本
東京三十六景一帖　大黒種志繪
折本
鳥追阿松海上新話　三編九冊
鹿島一夕話　三冊
折本
㊐倉陳氏五十四帖式帖　國扇

出版御届明治十年　月　日　第天七之區彩第下ロ一番地
味漢洋書籍　東錦繪地本　問屋　東京第一大區六小区日本橋通二丁目十九番地
編輯人　久保田彦作
出版人　大倉孫兵衛

010190510579


宝印